

## 平成24年度 北方四島交流教育関係者・青少年訪問事業（国後島）

ロシア人の印象が変わった3泊4日

吉田 遥

（富山県射水市立小杉中学校3年）

私は中学1年生の時に福井県で行われた「東海・北陸中学生のつどい」というものに参加しました。ここでは北方領土について学び、考えるなどの学習をしました。国後島の様子についても教えてもらいました。それから北方領土へ行ってみたいという気持ちが強くなりました。

そして中学3年生になって、国後島に行くことに見事なりました。根室から「えとびりか」に乗り込むとき、たくさんの方が見送りに来て下さいました。このときから、国後島に行くということは未知の世界に行くようなことなのかなとふと思いました。それから、約3時間後、ロシアの船「はしけ」に移動する準備が始まりました。「ビザなし交流」という名前ではありますが入域手続だけで約1時間もかかっています。ロシアに完全に不法占拠されて



いることを実感しました。このときにロシア人の顔が見えました。見た瞬間、恐怖でいっぱいでした。そのような心境の中ついに国後島での3泊4日の日々が始まったのです。

一般の方が運転されている車を使って島にある様々な施設等を視察しました。お世話になった運転手さんはジェンイェンというお名前でお仕事は水産物の密売などを取り締まることだそうです。犬を一匹飼われていて、娘さんがお一人いらっしやると聞きました。この様な事を知ることができたのは、私達が会話集を使って話しかけたことのロシア語の問いかけに運転中という大変な中でも耳を出来る限り傾けてくださったからです。答えるときも、私達の為に知っている英語や日本語を使うなどして分かりやすく説明して下さいました。乗車のときは「車の中ではどのような雰囲気になってしまうのだろうか」「自分から何か話さなくては」という不安な気持ちがありましたが、車に乗り込んですぐにジェンイェンさんから日本語で「おはようございます」と笑顔で挨拶をして下さいました。この様に少しずつ会話をしてい



く中で、私が今まで持っていた怖いという印象はかなり薄れていきました。

そして、たくさん島民の方とかかわる機会のひとつであったホームビジットではたくさん のことに気付かされました。その中でも特に印象に残っていることは、日本本土と北方領土が大変近いということもあり島民の方は日本に大変興味を持っていらっしゃったということです。私が訪れた家には



その家の奥さんとお友達の方がおられました。奥さんのガリーナさんは日本本土へ18回も来たことがあるそうです。つい先日にも来られたという話でした。そのようなこともあって日本の食べ物や生活用品などがたくさんありました。ふりかけやソースなどが入っているかごの中身はすべて日本のものでした。お友達の方も18回とまでとはいきませんが、3回ほどは来たことがあるということでした。本当に日本のことを好きだと思ってくれているということを感じました。

他に印象に残っていることは、「心遣い」です。まず食卓につかせていただいたときに箸が並べてありました。国後島に来てからは箸の無い生活が続いていたので、とてもうれしく助かりました。さらに通訳の方に来ていただいたときにいろいろ話を聞いてもらいました。するとお二人は糖尿病を患っておられるため、食事に制限があるそうです。そのような中でも私達のことを考えた食事をふるまってくくださったということでした。このことを知った時には胸が熱くなり、感謝でいっぱいでした。

この様なことを通して、今まで持っていたロシア人に対する悪い印象がすべて無くなり日本人には無いダイナミックで温かい心を持っている方がたくさんいらっしゃるということが分かりました。

いま日本は多くの領土問題を抱えています。中国人、韓国人、ロシア人この3カ国の人々に良い印象を持っている人はあまりいないと思います。こうってしまうのは報道されているうわべのことしか知らないからではないかと考えます。この様な状態では国民全体で相手の国に反抗的な態度をとってしまい「友好的に領土問題解決」ということから遠ざかってしまうでしょう。だからこそ相手の国のこと、いいところをたくさん知る事が求められるのです。私はまず、ロシア人のいいところを知ることができました。そのため今はロシア人を見ても恐怖や反抗的な気持ちは湧いてきません。1人1人の「知ろう」という意識がこの問題のすべてを変えたいと思います。だから私ができること、北方領土、ロシア人のことを「伝える」ということを率先して行っていきたいです。